医療機関向け児童虐待対応プログラム　BEAMS Stage2

演者：毎原　敏郎（兵庫県立尼崎総合医療センター）

第 36 回日本小児科医会総会フォーラム in KOBE で BEAMS Stage2 を採り上げてくださったことに改めて感謝申し上げます。

医療機関における子ども虐待対応は、子どもの生命と権利を守るための重要な社会的責務となっています。日本子ども虐待医学会が提供している BEAMS は、医療機関における虐待対応体制の構築と実践を支援するための研修プログラムです。 BEAMS の根幹を成すのは、「Child First」という理念です。これは、最も脆弱な子どもを第一として行動する意識であり、常に立ち戻るべきホームポジションとして位置づけられています。同時に、「Open Mind」の概念も重視され、決して感情的にならず客観性を維持し、医療者としての権限を適切に行使することが求められます。

BEAMS は Stage1 から Stage3 の 3 段階に分かれています。Stage1 は、受講者が子ども虐待の早期発見と通告の意義を理解し、医療機関での Sentinel（見張り番）として適切な行動がとれるようになることが目標です。虐待を受けた子どもに接する可能性のある医療関係者が主な対象で、子ども虐待について考えるきっかけになることを目指していますが、それ以外の方に医療機関の考え方を理解していただくために開催することもあります。本総会の参加者の中には、すでに受講された方もいらっしゃることと思います。昨年からは月 1 回のペースでオンラインでも配信していますので、ご関心をお持ちの方は下記をご参照ください。

https://beams.jamscan.jp/event/

Stage2 は、受講者が虐待を受けた子どもの安全を担保して地域へ繋げ、医学診斷を地域のネットワークに的確に提供できるようになることを目標としています。小児科医や CPT（Child Protection Team：院内児童虐待対応組織）のメンバー医師など、子ども虐待に日常的に接する職員が主な対象ですが、虐待についてより深く学びたい方も対象としています。二次医療圏での虐待対応能力のボトムアップを図ることを目指しています。

具体的な内容としては、Abusive Head Trauma (AHT)や性的虐待といった重篤なケースへの対応に重点を置き、具体的な診断手順や評価方法を示しています。医療機関に求められる全身骨撮影や頭部 CT・MRI 検査などの画像診断の適応、眼底検査の意義、血液・尿検査による鑑別診断の進め方など、エビデンスに基づいた医学的評価の方法をお伝えします。 さらに、子ども虐待対応において時として生じる「医療者の否認」という課題にも焦点を当てています。「あの親が虐待するはずがない」「事故で傷ついた親を追い詰めるのか」といった感情的な判断ではなく、客観的な医学的評価に基づいて子どもの安全を最優先する重要性を強調しています。

また医療ネグレクトや心理的虐待といった、より発見の難しい虐待形態についても、具体的な定義と判断基準を示し、適切な介入のタイミングと方法を提案しています。特に、養育者への支援においては、「指導」ではなく「支援」という姿勢を重視し、養育者の懸念に耳を傾け、これまでの努力を労いながら、実現可能な改善策を共に見出していくアプローチを勧めています。

Stage3 は、受講者が医療機関に置いて虐待対応のリーダーシップを発揮できるようになることを目標としている 2 日間の研修で、年に 2 回（東日本と西日本で 1 回ずつ）開催しています。Stage2、Stage3 は対面式で行います。

今回のセミナーでは、医療機関における子ども虐待対応の標準化と質の向上を目指す実践的なガイドラインをお伝えすることで、子どもの権利擁護と適切な保護・支援の実現に貢献し、皆様の診療活動において有意義なツールとなることを心から願っております。多くの方のご参加をお待ちしています。